
ミスティックシンフォニーセカンド！

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミスティックシンフォニーセカンド！

【Nコード】

N2279BA

【作者名】

零堵

【あらすじ】

碧川早苗と品川晶は、未来から来た時空ポリス、ミスティに言われて、フェイクと呼ばれる物をつまめるのを手伝っていた。

最後のフェイクがつかまってから一年後、再び未来からミスティとその弟、レイがやって来る。

ミスティは、再び、早苗と晶に、フェイクの捕獲の手伝いを頼むのであった・・・

〜第一話〜新たなフェイク誕生〜

ここは何処かの町

「今日も、仕事疲れたわ・・・」

そう呟いたものがいた。

そう呟いたのは、水色の髪の毛の長髪の女性。ミスティである。

「姉さん、お疲れ様」

そう話しかけたのは、ミスティの弟でもあるレイである。

「レイ、今日も無事仕事終わったわね」

「そうだね、今日のはわりと簡単だったかな？」

この二人の仕事と言うのは、時空ポリスと呼ばれる。悪しき物を捉えたり、世界の成り立ちを正常に戻したりする。所謂警察と呼ばれる仕事をやっていたりするのであった。

「じゃあ、レイ、家に帰って休みましょうか？」

「そうだね、姉さん」

二人がそう話していると、ピピピと腰に装着している通信機から無線が入った。

「はい、こちらミスティです」

「大変だ！」

「レーベン隊長？どうしたんですか？」

話しかけたのは、ミスティの上司であるレーベン隊長であった。

「フェイクがまた、過去に脱走した！ミスティ！至急現場に向かってくれ！」

「フェイクが！？」

「レーベン隊長、逃げたフェイクは一体何体ですか！？」

「逃げたのは、全部で13体だ！その全部が過去に時空超えて行ってしまった！ミスティ、全部捕まえるのだ！」

「レーベン隊長は行かないんですか？」

「俺は、別の仕事が急遽入ってしまったのだ、すまないがミスティとレイの二人で捕まえてきてくれ！頼む！」

「分かりました！」

「はい、了解です！」

「頼んだぞ！」

そう言って、通信が切れた。

「じゃあ、早速捜査を開始するわよ？分かったわね？レイ」

「分かったよ、姉さん、まず最初の一体のフェイクが何処に逃げたか調べるよ」

そういうと、レイは何かの機械で調べる。
数分後……

「分かったよ、姉さん、最初の一体の逃げた場所が」

「どれどれ……ここは……!」

「そう、以前僕達がフェイクを捕まえにいった町だよ、じゃあ早速行こう!以前のフェイクが現れた年代から一年後に逃げたみたいだよ!」

「そう……じゃあ、行くわよ!」

「了解!時空間ゲート解放……OKだよ!姉さん!」

「OK、ミスティックトラベル!」

そう言うと、二人はその場所から消えたのであった。
そして過去へと向かったのである……

〈過去の時代〉

ここは、とある町の中

急いで走っている者がいた。

「うっ遅刻しちゃっよ!」

走りながらそう言ったのは、
碧川早苗である。

みどりかわさなえ

早苗は、学校に遅刻しそうなので、走っているのであった。

「なんで目覚まし壊れてるかな・・・、新しいの買わないと・・・」
そづぶつぶつ呟いていると、早苗に声かける者がいた。

「つよ、早苗」

「あ、晶、走んなくていいの？」

早苗に話しかけたのは、早苗の幼馴染である品川晶^{しながわあきり}であった。

「まあな、ここからだ歩いても、十分間に合うぞ」

「そっか、じゃあ私も歩いていこつと」

そう言つて、早苗は走るのをやめた。

「それにしても・・・、一緒に歩くの随分と久しぶりな感じがするな」

「そうだったけ？まあ、朝は擦れ違いが多かったからね？」

「そうだな・・・それにしても・・・早苗もつけてるんだな？それ」

「そういう晶だつてつけてるじゃん、そのフェイクレーダー」

「まあな、もしかしたらまた変身出来るかも知れないしな・・・」

「そうだね・・・あれから、もう一年たったけど・・・結局ミスデ

「伊さんとか逢わなかったなあ・・・」

この二人は過去にミスティから、ある物を貰って変身して、ミスティの手伝いをしていたのである。

そして、その手伝った記念にミスティグローブ、フェイクリーダー、ライトブーツの三点を、二人は貰ったのであった。

「また変身とかして、正義の為に戦ってみたいんだけどなあ・・・早苗は、どうだ？」

「私？そうね・・・楽しかったし・・・またやってみたいと思ったことはあるけど・・・でももう、無理なんじゃないかな？フェイクリーダー、あれから鳴った事がないし」

そう二人が話しているとうと、ピーっと言う音が二人の腕にしている、フェイクリーダーが鳴り出したのであった。

「え！？フェイクリーダーが鳴ってる！？」

「俺のもだ！これはもしかして・・・」

そう二人が話した後、二人の立っている前方の空間が歪んで、中から二人現れたのであった。

「あ！・・・ミスティさんにレイ君！？」

「お久しぶりです！早苗さんに晶さん！二人とも・・・一年前とあまり変わってなくてよかったです！」

「お久しぶり、僕も姉さんと一緒にやってきたんだ」

「もしかして・・・またフェイクが現れたの!？」

「はい、そうなんです!この町の近くに未来からまた、フェイクが脱走したんです、早苗さん、晶さん、また協力してくれませんか？」

「俺はするぜ!早苗はどうだ？」

「私もするよ!また、ミステイさんの力になりたいし」

「ありがとうございます!じゃあ、レイ!フェイクの現在位置を特定して？」

「分かったよ、姉さん、フェイクは・・・」

そう言って、レイは調べる。

「ここから五百メートル離れた場所にそれらしい反応があるよ!」

「そう、じゃあ行きましょう!」

「うん!」

「OKだぜ!」

こうして、四人は学校と反対方向へと向かうのであった・・・
それを見ていた者がいた。

「あれ?早苗ちゃんと晶君、学校と反対方向に向かっているけど、どうしたんだろ?もしかして・・・これは絵本のネタがまたやってき

たつて事かしら？私も行つてみよつと！」

そう言ったのは、早苗の親友でもある篠崎律子しのきりつこであった。

律子は早苗と晶の二人を追いかける事にしたみたいである・・・

そして・・・学校では、キーンコーンと授業の開始を知らせる鐘が
鳴り響いていたのであった・・・

↳ 第一話↳ 新たなフェイク誕生↳ (後書き)

ミスティックシンフォニーの続編です。

〜第二話〜最初のフェイク〜(前書き)

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第二話〜最初のフェイク〜

未来いたミスティとレイは、再びフェイクが逃げだしたのでそれを捕まえるために、過去へと戻っていき、過去と一緒に協力した者たち、早苗と晶に一年ぶりに出会ったのでした・・・

「ここが現場みたいだよ？」

そう言ったのは、ミスティの弟、レイであった。レイは、ミスティと同じく時空ポリスでもある。レイは、フェイクが出現したと思わる場所に、ミスティと早苗と晶を案内したのであった。

「そう見たいね・・・でも、ここであってるの？レイ」

「うん、間違いないみたいだけど・・・姿が見えないって事は何かに擬態して、姿を消してるのかも」

「何かに擬態か・・・早苗、お前わかるか？」

「私に聞かないですよ？晶・・・そうね・・・」

早苗は、キョロキョロとあたりを見渡してみる。辺りは公園で、子供たちが普段遊んでいる滑り台やブランコ、砂場とかあった。

「あ、あれかな？あの砂場の中」

「砂場の中？どれどれ？」

そう言っつて砂場の中を確認してみる。
砂場は異様に盛り上がり上がっている場所があった。
まるで砂場の中に何か隠れてるみたいでもある。

「あ、あれだよ？姉さん、フェイク反応、確かにあの砂場から出てるよー！」

「そう、じゃあさっそくフェイクを捕まえるわ！早苗さん晶さん、協力してくれませんか？」

「俺はOKだぜー！」

「私もだよ？でも、何をしたらいいの？」

「また変身して、協力してください」

「変身？俺、あれから何回も変身しようとしたけど、出来なかったぜ？」

「晶・・・そんな事してたんだ・・・（まあ私もちょっとだけやってたけど）」

「あ、そうでした、ちょっとそのミスティグローブ貸してください」
ミスティグがそう言うと、二人は装着していたミスティグローブをミスティに渡す。

「セーフティロック解除、コスチュームチェンジ解禁！はい、これで再び変身出来るようになりましたよ」

そう言ってグローブを二人に返す。

「本当！？ありがとう、ミスティさん」

「よっしゃあ！腕がなるぜ！」

「使用方法とかはわかってますね？じゃあお願いします！」

「了解、行くぞ！早苗」

「うん、晶！」

早苗と晶はあの言葉を言う。

「ミスティックシンフォニー！」

「ミスティックシンフォニー！」

そう言うと、早苗達が光りだし、コスチュームと武器が握られている。

早苗は、槍を持った騎士に、晶は大きな剣を持った剣士になっていた。

「うおお！懐かしいぜ！やっぱり正義と言ったら剣士だよな！」

「私も結構かっこいい服装になったわ、なんか力がみなぎるって感じかな？」

「早苗さん！晶さん！よろしくお願いします！私とレイはサポートしますので！」

「了解！行くよ？晶！」

「おお！」

晶はフェイクがいると思われる砂場に向かって剣を振り下ろす。

「行くぜ、シャインクロス聖剣十字斬！」

「何？その技？」

「ゲームで俺の好きなキャラの技さ、とりゃあ！」

晶の剣技が砂を巻き上げて風をおこした。
砂がはれてフェイクの正体が判明した。

「あのフェイク・・・識別・・・虫型フェイクみたい」

「虫！？なんか嫌だわ・・・なんかあの形見ると・・・あの虫を
思い出しそう」

「そういえば姉さん、あの虫嫌いだったよね・・・ほらあのゴ・・・」

「それ以上言っちゃ嫌あ！」

「グ・・・姉さん・・・何も叩かなくても・・・」

そう言ってレイはミステイの攻撃をくらって気絶したみたいである。

「なんかあの形何かに似てると思わないか？早苗・・・」

「それ以上言わないで、さあとつとと倒すわよ！」

「お、おおー！」

早苗と晶は虫型フェイクに向かって攻撃を繰り返す。

虫型フェイクは、早苗と晶の攻撃をギリギリでかわす。

「く、なかなかダメージを与えられないわね・・・しかもカサカサ音がして、あの生物そっくり！早く倒すわよ？晶！」

「そうだな・・・よし、早苗、俺が攻撃するから、逃げたところをお前が仕留めろ！」

「わかったわ！」

「よし、行くぞ！」

晶は虫型フェイクに向かって切りかかっていく。

虫型フェイクは、晶の剣技を避けて、早苗のほうに飛ばうとしていた。

「早苗！今だ！」

「うん、いっけええ！」

早苗は槍をぶん投げる。
槍はまっすぐ飛んでいき、虫型フェイクに突き刺さった。

「よし、決まったわ！」

「今がチャンス見たいですね！行きます・・・未来に帰れ！ミステイックフォース！」

ミステイの言葉によって、虫型フェイクはすーっと消滅したのであった。

「これで、任務完了です、ありがとうございます、早苗さん晶さん」

「いや、こっちも久しぶりに正義の事が出来てよかったぜ？」

「私も、こつうちのちょっと楽しかったかな」

そう言っていると、タイムリミットが過ぎたのか、早苗と晶の服装が元に戻ったみたいである。

「いたたた・・・姉さん、力強すぎだよ・・・、あ、どうやら終わったみたいかな？」

レイが気絶から目が覚めたみたいである。

「そうよレイ、なんとか最初の一体は未来に送り返したわ」

「そうみたいだね、あと残りは十二体だよ」

「そうなの？ミスティさん？」

「ええ、そうなんです、早苗さん晶さん、よろしければ最後まで協力してくださいませんか？」

「俺はOKだぜ？早苗は？」

「私もOKよ？」

「ありがとうございます、じゃあレイ、フェイクの情報はどうなってるの？」

そう言ってレイは、機械を動かしてこう言う。

「今のところ情報はないから、未来に戻らないとわからないよ？」

「そう、じゃあ未来に戻りましょう、早苗さんに晶さん、私とレイは、未来に戻るの、これを渡しときます」

そう言ってミスティは早苗たちに何かを渡す。

「これは？」

「これはミスティックフォンです、これで私との連絡が取れるので、再びフェイクが現れた時に連絡します、じゃあ行くよ？レイ」

「了解、姉さん」

そう言っつてレイとミスティは、早苗たちから離れていったのでした。

「あと十二体か・・・次がどんなのが出てくるのだろうな？」

「さあ、でも全部捕まえてみようと思っつかないかな？」

そう話していると、早苗たちに声をかけてくるものがいた。

「早苗ちゃんに晶君、見させてもらったわよ？」

「あ、律子ちゃん？いたの？」

声をかけたのは、早苗の親友の篠崎律子しのざきりつこである。

「ええ、これでまた絵本の構想到役に立ちそうだわ それより・・・

」

「それより？」

「もう完璧に学校、遅刻してるわよ？まあ私も人の事言えないけど」

「あ、そうだった！」

「すっかり忘れてたな、とりあえず学校行くか？」

「そうね・・・」

「じゃあ行きましようか？」

こうして三人は、遅刻しているの確定だったが、学校に行くことにしたのであった・・・

〜第二話〜最初のフェイク〜(後書き)

零堵です。この物語も投稿します。

〜第三話〜美理亜の誕生日〜（前書き）

はい、零堵です。

続きの話です。

〜第三話〜美理亜の誕生日〜

再びフェイクが出現してから、一週間後の出来事のこと
早苗達に通っている学校の教室にて、早苗に話しかけてくる者がいた。

「早苗さん……」

「あ、美理亜ちゃん、どうしたの？」

早苗に話しかけてきたのは、一年前に転校してきた。
手に腹話術か呪いの熊人形？を持っている伊藤美理亜いとみりあだった。

「実は、今日の夜にパーティーがあるのだけど……早苗さん……
よければ参加しない……？」

「パーティー？一体何のパーティーなの？」

「それは来てからの楽しみだぜ？まあ結構楽しめると、おいらは
思ってるぜ〜」

そう言ったのは美理亜の持っている熊人形、名前はジョニーである。

「出来れば多くの人を誘ってくれとありがたいわ……」

「うん、パーティーか〜、なんか楽しそうかも？うん、私はOKだ
よ〜」

「そう……ありがとう……、じゃあこれに場所と時間書くから・

・・・

「遅れずに来いよな〜？おいらとミリーは歓迎するぜ？」

そう言っつて、美理亜は早苗に紙を渡すと、教室から出て行ったのであった。

「多くの人を誘っつてとか言っつてたから・・・そうね・・・」

早苗は、何かを考えた後、行動を移すことにしたのであった・・・
そして、夜

「なあ？ここであつてるのか？」

そう言っつたのは、早苗の幼馴染でもある品川晶しながわあきいである。

「地図によると、ここに間違いないみたいだけど・・・ここっつて・・・」

「ここっつて、確か最近有名な幽霊屋敷と呼ばれるようになった場所よな？」

そう言っつたのは早苗の親友の篠崎律子しのざきりつこであった。

「ゆ、幽霊屋敷？わ、私、そんなの知らないよ！？」

「幽霊なんているわけないだろ、そんな非科学的な事は信じられんな」

そう言ったのは、同じクラスの香川武人かがわたけひとで

ちなみに科学研究部なのでオカルトは全く信じないタイプでもある

(なあ、俺たちの変身とかやっぱ武人にとっては非科学的なんか？
早苗？)

(私に聞かれても・・・、武人君の前では変身しないほうがよさそうかもね？)

「ん？何を二人で話しているんだ？」

「ううん、別になんでもないよ？じゃ、じゃあ入ろうか・・・」

「早苗ちゃん？大丈夫？足、震えてるわよ？」

「だ、大丈夫・・・せつかく美理亜ちゃんが誘ってくれたんだし・・・ここで帰っちゃ印象悪くしちゃうしね・・・じゃ、じゃあ晶、扉開けて？」

「なんで俺なんだ？まあいいけど・・・」

そうブツブツいいながら、屋敷の扉を開ける。

中に入ると、うす暗く、明りはろうそくの明かりだけだった。

「おーい、伊藤、来てやったぞ？どこにいるんだ？」

「なかなか雰囲気あるわね、これはネタになるわ」

「な、なにか出そうな雰囲気だよ・・・怖くない怖くない・・・」

お化けなんて……」

「なんで電気を使わんのだ？これじゃ中の様子が全く分からないではないか……」

そう話していると、奥から声が聞こえた。

「こつちよ……」

「そのまま真っ直ぐ行ってみるといいぜ」

そう言われて四人は真っ直ぐ進む。

進むと、扉があり、中に入ると美理亜がフードを被った状態で、現れた。

「よく来てくれたわ……ありがとう……」

「おお……、ところで伊藤？何のパーティなんだ……？」

「今日読んだのは……ちよつと……」

「ほら、ミリー、せっかく呼んだんだから、ちゃんと試ってみろっ
て」

「そうね……実は、今日……私の誕生日なの……だから皆を
呼んだの……迷惑だった……？」

「た、誕生日？な、なんだ……てつきり俺は何かオカルトの交霊
会とかやると思ってたぜ……」

「今日誕生日だったんだ・・・、じゃあお祝いしなくちゃね？」

「ところで気になってただけ・・・なんでこんな事を？フード被ったり、部屋暗くしたり・・・」

「実は・・・誕生日のやり方がよくわからくて・・・昔から魔術とかが大好きだったからこういう感じにするととても落ち着くのよ・・・両親もともに私の誕生日とか祝ったことがなくて・・・部屋が暗いのは、もともと電気とか使うのをやってないからろうそくで十分だから・・・部屋はこんな感じなの・・・」

「そ、そうなの・・・じゃあ、私が誕生日のやりかたを教えてあげるよ」

「そうね、私も協力するわ」

「武人、俺たちも手伝うか、せっかく来たんだしな」

「ま、まあ何もしないというのなんだしな、手伝うぞ」

「あ、ありがとう・・・」

こうして、美理亜の誕生日会が始まったのであった。

「じゃあ、ケーキは用意してあるみたいだし、ろうそくをケーキにさすね？」

「しかし、ケーキとろうそくの大きさがあってないんだが・・・てか何で・・・赤ろうそくしかないんだ？」

「それは…」

「おっとミリー、それを言っちゃ駄目だぜ？」

「そうだったわね・・・気にしないで・・・」

「非常に気になるんだが・・・まあ、忘れる・・・」

そう言っているうちにケーキに美理亜の年齢と同じ数のろうそくをたてる。

「じゃあ、点火するよ？ 焔、ライターとか持ってる？」

「そんなもん、不良じゃないんだから持ってるわけないだろ」

「私に任せてくれ」

そう武人が言うと、懐から小型バーナーらしきものを出して、ろうそくに点火させる。

「何でおまえ、そういうの持ってるんだ？」

「何事も備えあればうれいなしだからな、結構便利だぞ？」

「いや、捕まるぞ、そんな物騒なもん持ってたら・・・」

「ま、まあこれですいたんだからいいじゃない、じゃあ美理亜ちゃん、ハッピーバースデートウユー、ハッピーバースデートウユー、ディア美理亜ちゃん」

「ハッピーバースデートウユーだ、伊藤」

「おめでとう、美理亜ちゃん」

「おめでとうだな」

「あ、ありがとう・・・」

そう言っつて、美理亜は火を消す。

「誕生日って知らないから何もプレゼント用意してないけど、ごめんね？」

「いいの・・・来てくれただけでうれしいから・・・もしかしたらこの屋敷を見て、誰も来てくれないかも・・・とか思ったりもしたし・・・」

「そんな事はしないわよ、ちゃんと招待してくれたんだから、約束は守るわよ」

「俺もだぜ」

「私も、だから気にしなくていいよ？美理亜ちゃん」

「よかったな？ミリー」

「うん・・・そうね・・・」

こうして、美理亜の誕生日会は開かれたのでした・・・
早苗達が帰った後

「なあミリー、結局あいつら視えなかつたんだな？ いっぱいいたの
に？」

「そうね・・・でもいいのよ、私の誕生日会だし・・・靈感がない
ほうが幸せって事もあるよ・・・まあ、写真とか撮ってたら・・・
どうなってるかは楽しみかもね・・・」

「まあ、ここは幽霊屋敷と言われてることだけはあるしな」

「そうね・・・」

そう言って美理亜はすくすく笑ったのである・・・

く第三話く美理亜の誕生日く（後書き）

この物語も、よろしくお願いします。

〜第四話〜 未来の出来事〜 (前書き)

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第四話〉未来の出来事〉

一体目のフェイクを捕まえたミスティとレイは一旦未来の世界へと帰っていたのであった。

〈未来〉

「未来の世界へ無事到着ね・・・」

「そうだね、姉さん、設定した場所も時間も間違っていないよ」

「じゃあ、早速、レーベン隊長に報告よ」

「了解」

二人はそう言うと、移動して、そしてたどり着いた場所は、「時空ポリス署」と書かれてある建物である。その中に入って、二人に話しかけてくる者がいた。

「うむ、無事に戻ってきたようだな」

「はい、レーベン隊長」

二人に話しかけたのは、二人の上司でもある。四十代に見える何故かカイゼル髭のオジサンだった名前をレーベンと言われている

「ミスティ君にレイ君、まず一体を捕獲したからと言って、まだま

だ十二体いるから、心してかかるように」

「はい、ところで・・・」

「ん？何だね？」

「前からず〜っと言おうとは思ってたんですけど・・・」

「うん、僕もそう言おうと・・・」

「何かね？」

「何でそんな髭してるんですか？他の人見ても、そんなに突っ張ってる髭、隊長しかいないんですけど？」

「これかね？これはだな・・・ふむ・・・まあ、趣味だ」

「・・・はあ」

「な、なんだその顔は！別にいいだろ？自慢の髭なのだからな！」

「まあいいですけど・・・」

「と、とにかく、私は仕事が残ってるので行くが、二人とも、フェイクの搜索&確保、頼むぞ」

「りよ、了解」

そう言って、レーベンは二人のいる場所から去って行く。

「じゃあ早速、次のフェイクの居場所を探しましょうか？」

「そうだね、姉さん、手持ちの機械じゃ搜索できないから、スーパーコンピューター室で調べよう」

「そうね」

そう言つて、二人は移動したのであつた。

スーパーコンピューター室

そう書かれた部屋に入った二人は、そこを管理している者に話しかける。

「ア、ミステイサンニレイサン、イラツシャイマセ」

「ちょっとスーパーコンピューターで調べたいことがあるから、使わせてもらつわよ、ロボ」

「ハイ、ワカリマシタ」

ロボと呼ばれた者がそう答える。

スーパーコンピューター室を管理している者は、体が機械で出来ている人型汎用アンドロイド（ちなみに男性型）、通称、ロボと呼ばれる者が管理していた。

「ロボ、最近逃げ出したフェイクの所在地、調べてくれる？」

「ハイ、リョウカイデス、イメージサーチャーオン、メインプロگرامニアクセス・・・ナウローディング、ケンサク・・・フェイ

クジヨウホウ・・・ケンサクケツカ、フェイクイットアイノジヨウホウアリデス」

「フェイクー体ね、それが出現すると思われる場所は？」

「サイシヨニ、ミステイサンタチガ、ホカクシタフェイクガ、アラワレタネンダイカラ、イツカゲツゴノジカンニ、シュツゲンシテマス」

「つまり、あのゴ・・・、まあ昆虫型フェイクがあらわれてから一ヶ月後に、現れる可能性って事かな？」

「ハイ、ソウナリマス」

「ありがとう、じゃあ早速行くわよ？レイ」

「解ったよ、姉さん、ロブ、ありがとう」

「イエ、ドウイタシマテ、アナタタチノヤクにタテテヨカッタデス」

そう言った二人は、時空ポリス署を出たのであった。

街中

「じゃあ、年代と時間を合わせて飛ぶわよ？設定よろしくね？レイ」

「了解、設定・・・完了、行くよ？姉さん、ミスティックトラベル！」

そうレイが言うと、二人の間に空間ができて、二人を吸い込んで、二人は過去の時代に行く事になったのでした・・・
その頃

「おい、ロボ」

「はい？何でしょう？レーベン」

「何であの二人にはカタカナ言葉で話して、私には普通に話しかけてるんだ・・・？」

「だってそつちのほうがロボットらしくていいでしょ？あの二人は、僕としても結構気に言ったりしてるんですよ」それにあまり不思議がってませんし？別にいいじゃないですか？何も問題は、無い筈ですが？」

「じゃあ私は？」

「興味ないです」

「即答ですか・・・」

そう二人は話していたのであった・・・

〜第四話〜 未来の出来事〜 (後書き)

続きの話を投稿します。

〈第五話〉二体目のフェイク〈前書き〉

はい、零堵です。

続きの話です。

〈第五話〉二体目のフェイク

虫型フェイクを未来に戻して、大体一ヶ月過ぎたある日の事
放課後の学校にて

「ねえ、早苗ちゃん」

早苗に話しかけたのは、早苗の親友でもある篠崎律子しんざきりつこであった。

「何？律子ちゃん？」

「実はね？ある雑誌に「絵本コンテスト」という企画が発表されたの、その、企画に応募しようと思って、新しく絵本を書いてみたんだけど、読んでくれない？」

「律子ちゃんの絵本？一体どんな話なの？」

「それは、読んでからのお楽しみってことで、じゃあこれ、読んでみて？一応候補作として、書いてみたの、私は用事があつて帰るから、明日、このノートを返して感想聞かせてくれないかな？」

そう言って律子は、ノートを早苗に渡す。

「うん、判ったわ」

「じゃあね？早苗ちゃん」

そう言って、律子は教室から出て行ったのであった。

「じゃあ、早速家に帰って読もうかな」

そう言つて早苗はかばんにノートを入れて、学校を出る。学校の帰り道に、前を歩いていた晶を見つけた。

「あ、晶」

「よ、早苗、お前も真つ直ぐ帰るのか？」

「お前もつて？晶はなんかあるの？」

「ああ、これから正義戦隊「ボウエンジャー」が始まるからな、それを見ようと思つてな」

「正義戦隊「ボウエンジャー」？ガンバルダーはどうしたの？」

「あれは、感動のラストを迎えて終わったぞ？それから新しく次の週から始まったのが、正義戦隊「ボウエンジャー」なんだ、まあ俺としては何故か主人公の色がホワイトなのがいただけだが、普通はレッドだろう、そこは・・・敵の名前だつてア・クマールとかそういう名前というのみな」

そう晶がぶつぶつ呟いていると、早苗たちの持っているフェイクリーダーが鳴り出した。

「あ、鳴ってる？と、言うことは・・・」

「また、フェイクが現れたつてことか？」

「はい、現れます」

早苗達に、いきなり話しかけて来る者がいた。

「うわ！ミステイさんにレイ君！いきなり話しかけられてびっくりしたあ」

「お久しぶりです、早苗さんに晶さん」

「お久しぶり、今回のフェイクだけど・・・調べたら、あと十秒ぐらいで目の前に現れるみたいだよ」

「え？十秒後に？」

そう話して、十秒たった瞬間

空間が歪んで、なから人型の真っ黒い覆面をした生物が現れた。

「あれがフェイクです、早苗さん、晶さん！」

「了解！行くよ！晶」

「なんかヒーロー物とかに出てくる雑魚戦闘員みたいなんだが、ああ、判ってるぜ！」

早苗と晶は、あの言葉を言う。

「ミステイクシンフォニー！」

「ミスティックシンフォニー！」

そう言った瞬間、早苗達の装着しているグローブが光り出し、早苗と晶のコスチュームが変わった。

早苗は、格闘家が着るような胴着姿に、晶は、ヒーローが来ているバトルスーツを着た者になっていた。

「なんか強そうな格好になったわ」

「これぞ、アクションの醍醐味、行くぜ！」

「早苗さん、晶さん、お願いします！」

「了解！行くよ！映画でみた拳を食らいなさい！アタタタアア！
！」

早苗は、人型フェイクに向かって拳を繰り出す。フェイクはそれを器用に防御しながら「キーキー」とか言っていた。

「ますます雑魚戦闘員っぱいな、こっちも行くぜ！」

そう言って晶も拳や蹴りを繰り出す。

まあ結果はどうなったのかと言うと、単純に考えて二対一なので、フェイクは、あっさりと弱っていた。

「今です！喰らいなさい！ミスティックフォース！」

そうミスティクが言うと、フェイクはやっぱり「キーーーー」と言いながら消滅したのであった。

「これで二体目のフェイク確保完了だよ、姉さん」

「そうね、早苗さん晶さん、ありがとうございます」

「いいよ？、こっちも楽しかったし」

「ああ、最後の叫び声まで、雑魚戦闘員ばかりだったが・・・まあ、これぞ正義のなせる技ってとこだしな」

「次のフェイクだけど・・・やっぱり未来にもどってロブに搜索して貰わないと、無理そうだよ？姉さん」

「そう、じゃあ未来に戻るわ、さようなら、早苗さんに晶さん」

そう言って、二人は早苗達から離れて行く。

二人が離れて行った後、晶がこう言って来た。

「っと、俺も帰って「ボウエンジャー」見ないとな、じゃな、早苗」

「あ、うん、またね、晶」

晶も家へと帰って行く。

「じゃあ、私は家に帰って、律子ちゃんから貰ったこのノートを見ようかな？」

そう言って、早苗は家へと帰る。

家に帰ると、いきなり早苗に抱きつく者がいた。

「お帰りなさい〜早苗〜」

「あ、お母さん、ただいま〜」

いきなり抱きついたのは、早苗の母親でもある、みどりかわえな碧川恵奈であった。

「今日はちょっとおそかったけど、どうしたの？」

「晶とちよつと話してて遅れたかな？あ、そうだ、お母さん、律子ちゃんに貰ったノート、これから見るんだけど、一緒に見る？」

「そうね、夕飯の準備はもうできてるし、いいわよ？一緒に読みましょつ」

・
そう言って、二人で仲良く律子のノートを見る事にしたのでした・

〈第五話〉二体目のフェイク〈後書き〉

続きの話を、投稿します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2279ba/>

ミスティックシンフォニーセカンド！

2012年1月6日19時54分発行